

お水取り（修二会）の歴史と、その行事で使用する履物
Omizutori (the rite of drawing sacred water) and
the footwear in this rite

東大寺福祉事業団

President of Todaiji Medical and Educational Center

平岡 昇修

Shoshu Hiraoka

特別講演

お水取り（修二会）の歴史と、その行事で使用する履物

Omizutori (the rite of drawing sacred water) and
the footwear in this rite

東大寺福祉事業団

President of Todaiji Medical and Educational Center

平岡 昇修

Shoshu Hiraoka

Key word: お水取りと沓 (sacred water, ritual footwear)

【修二会】の名称は毎年旧暦の2月1日から2月14日までの14日間十一面観音菩薩に罪過を懺悔し、災いを除き、福を招くように祈る法会であるために2月に修められる法会=修二会と呼ばれるようになった。そして、お堂の名称も二月堂と呼ばれるようになるのである。旧暦の1日は真っ暗な新月にあたり14日は満月にあたるので、月が満ちるように行法が成就され悟りが開かれていくことを象徴しているように思われる。しかし、明治5年12月3日を明治6年1月1日に太陰暦から太陽暦に改暦が施行されたため、明治6年以降3月1日から3月14日までの期間に修二会を行うことになってしまった。また【お水取り】の名称は1685年（貞享二）江戸時代の大仏殿再興のために活躍された公慶上人（38歳）が最後の参籠（水を汲む役の呪師）のとき、松尾芭蕉（42歳）が二月堂を訪れて『水取や 氷の僧の 沓の音』の句を詠み、以後この行事は【お水取り】と呼ばれるようになった。

【二月堂縁起絵巻】(天文十四年〈1545〉奥書)によると、天平勝宝三年〈751〉十月、実忠和尚が笠

置寺（かさぎでら）の竜穴に入り、北へ一里ばかり行くと、兜率（とそつ）(都卒)の内院に到着した。そこで四十九院の摩尼宝殿（まにほうでん）を巡礼していると、もろもろの天衆が集まって十一面観音の悔過を勤修している常念観音院というところがあった。聖衆の行法を拝して、これを地上の人間世界に移そうとしたが、天上界の一昼夜は、人間界の四百歳にあたり、行法の規範は厳しく、千遍の行道を怠りなく勤修し、人の成しうる業でないばかりか、生身（なまみ）の観音がいなければ、この行法を模倣することはできないといわれたため、勤行の作法を急ぎ、千遍の行道を走ってこの数を満たすといって地上に持ち帰り、摂津の国、難波津に行き、観音浄土の補陀落山（ふだらくせん）に向かって香花を供え、祈願勧請し、閻伽（あか）の器（仏に供えるものを盛るための器）を放ったところ、百日ばかりへて、生身の観音が閻伽の器に乗って漂着した。その観音を二月堂に安置して行なったのが修二会の始まりである。

修二会に関する逸話

1. 実忠の行法には、神々1万3700余柱が招かれた。若狭国の遠敷明神は魚を捕っていて遅刻したため、香水を出して謝すことにした。すると黑白2羽の鶴が岩の中から飛び出して、そこから泉

(2017/11/14 受付)

連絡先：平岡 昇修 〒630-8211 奈良県奈良市雑司町406-1

TEL 0742-23-6392 FAX 0742-23-6391

E-mail padma@mahoroba.ne.jp

が湧き出た。3月12日の深夜、一抱えもある呪師松明を先頭に水を汲む役の呪師が下堂し、若狭井から香水を汲む。この香水は若狭国からこの日にだけ送られるという「水取り」の行法の際には長い柳、法螺貝、鈴を共に運ぶ。752年から一度も絶やすことなく続いている独特の行法である。

この日汲み上げられた香水は、香水壺に移される。香水は罪穢を清め祓う呪力をもっている。千有余年の間、毎回補充される根本香水を入れた壺もある。香水は聴聞者に3月5、6、7、12、13、14日の走りの行法のあとに授けられる。効能には、六波羅の後藤次左衛門尉の同宿の女が腹痛を患うも、二月堂の香水を与えるとオオガエルを吐き出し全快したとある。

2. 承元年中(1207~1211)過去帳を読んでいた僧 集慶(じゅうけい)の前に、青い衣を着た女性が忽然と出現した。「なぜに、わが名を過去帳から読み落としたのか」と言う、姿を消した。以後は「青衣の女人」と名付けて読み続けている。

お水取りで使用する履物

お水取りで使う履物には色々なものがある。

「水取や 氷の僧の 沓の音」

「水取や 籠りの僧の 沓の音」

宿所から入浴のための湯屋までの行き帰りには、湯屋下駄(ゆやげた)を使用する。宿所から二月堂本堂への上がり降り、食堂への移動には、古くは板を中敷きにしていた板草履(いたぞうり)を使用する。現在、中敷きは帆布を使用している。二月堂本堂の中では差懸(さしかけ)と呼ばれる履物を使用する。それは木履(ぼっくり)の爪先を、爪皮のように厚紙で覆ったもので、爪皮の部分には胡粉を塗り、他人と区別するために各自の紋を貼る。修二会では、差懸をはいての所作は、床を踏み轟かしたり、走ったり、という通常の法会に見られないような所作も屡々見られる。修二会の始まる前段階の別火の2月27日の早朝4時ごろ粟の飯(あわのい)という行事がなされる。早朝に若手の僧侶2人が起床して、紙衣に湯屋小袖(ゆやこそで)の姿で、先ず火鉢の炭火を沢山おこし、鉄キューを真っ赤に焼く。次に大広間の縁に立てかけてある差懸には新調したことを示すために差懸の裏側に薄様の紙が貼り付けてある。その裏側の上下2箇所、一円玉ほどの粟の飯をつけ、鉄キューで1つずつ焼き付ける。差懸は一人二足ずつあるので、22足分の作業である。これによって差懸は新調され清められるのである。この差懸こそが、松尾芭蕉の句にある沓である。